



# 歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし②

近年しばしば猪いのししによる農作物の被害が報じられ、都市部にまで及ぶ勢いらしい。実は江戸時代こそ猪や鹿かによる被害が強調された時代である。

## ■倉橋や蒲刈で被害

広島広島の南に横たわる倉橋島では、延享元（一七四四）年に藩の融資で大規模な猪狩りを行った。島の中央部で幅が狭くなる先奥から釣土田にかけて高さ六尺五寸（約二尺）、長さ千二百間（約二・二キ）の柴垣しばかきを築き追いつめる作戦であった。

その後も猪鹿討ち取りに報償金を出したが、資金が底をついた宝暦元（一七五一）年には再び被害が激化。翌年、村存亡の危機として、再度藩へ融資を願っている。

## 大規模な狩りや石垣

### 猪鹿防御

それによると、山際では耕放棄地が増え、一見被害のなさそうな田も実の入らない「しいら」になった。猪から田畑を守る番小屋の人夫が延べ九万四千人、もはや人を恐れず、竹の子も食い荒らし、一冬に子供を七、八匹から十一、二匹も産むという。あまりに多産なので、前回紹介のフタとの交雑による増殖さえ疑わせる話である。

隣の蒲刈島では、宝永三（一七〇六）年に藩から鉄砲玉、火薬費の融資を受け、十日余りで「腹籠もり」の子供も含めて百五十匹の猪を討ち取った。「海にて取」る一匹もあったというから、やはり猪は昔から海を泳いだらしい。このように、島々では限られた空間だけにしばしば猪や鹿を絶滅させようとした。

## ■安浦に貴重な遺構

一方、陸地部では日常的に討ち取り、追いつめを試みるほかに、長大な石垣を築いて専守防御に努める村もあった。

呉市安浦町内平地区に残る猪鹿垣は、地元の福本俊彦、向巖両氏との調査の結果、その配置が「芸藩通志」所載絵図と合致し、文化十（一八一三）年築造時の古文書や記念碑も伝えられる貴重な遺構と判明した。

さて、このような猪による農作物被害の激化は、果たして猪だけのせいなのだろうか。

（広島大教授・佐竹昭）



山中に埋もれた猪鹿垣（呉市安浦町内平）

土曜日に掲載します